

修士論文(要旨)

2009年1月

高齢者ボランティアと6年生児童の  
交流授業の効果に関する研究

指導 渡辺修一郎 教授

国際学研究科

老年学専攻

207J6006

大場 宏美

## 目次

### 序章

第1章 研究の目的	1
1.1 目的	1
1.2 問題の所在	1
(1) 家庭や地域社会の変容に伴う子どもの学習機会をめぐる課題	
(2) 思春期に入りかけた児童へのかかわり	
(3) 児童のコミュニケーションスキルにおける課題	
(4) 開かれた学校づくりと学校支援ボランティアの導入をめぐる課題	
第2章 レビュー	2
1.1 世代間交流研究	2
2.1 学校支援ボランティア	4
3.1 世代間交流型介入研究“REPRINTS”	4
3.2 世代間交流型介入研究“REPRINTS”における高齢者イメージに関する研究	5
第3章 研究の方法	5
1.1 方法	5
1.2 対象	6
1.3 分析	6
2.1 倫理的配慮	6
第4章 結果(1) 児童への効果の検討	7
1.1 コミュニケーションスキルへの効果の検討	7
1.2 結果	7
2.1 高齢者イメージ得点への効果	8
2.2 結果	8
3.1 ソーシャルサポート得点への効果	9
3.2 結果	9
第5章 結果(2) 高齢者ボランティアへの効果の検討	10
1.1 コミュニケーションスキルへの効果	10
1.2 結果	10
2.1 子どものイメージ得点への効果	10
2.2 結果	11
3.1 次世代育成指向尺度得点への効果	11
3.2 結果	11
第6章 考察	11
1. コミュニケーションスキルへの効果	11
2. イメージ得点への効果	12
3. ソーシャルサポート得点への効果	12
4. 次世代育成指向尺度得点への効果	12
5. まとめ	12
参考文献、資料	

## 1. 目的

公立小学校において、絵本の読み聞かせを媒介として、親愛かつ指導的な立場にある高齢者ボランティアとの集中的な介入－高齢者と児童の「読み聞かせ学習のための交流授業」(以降、交流授業と称する)－および低学年児童(1-2年生)への読み聞かせ活動を行う。交流授業によるコミュニケーション力およびお互いのイメージに与える6年生児童と高齢者それぞれへの効果を検証する。

## 2. 問題の所在

①家庭や地域社会の変容に伴う子どもの学習機会をめぐる課題:核家族化やライフスタイルの変化により家庭生活や地域生活のあり方が変容し、子どもが自然な世代間交流によって礼節や社会性を身につける機会が減少している。②思春期に入りかけた児童へのかかわり:子どもの存在価値を認めた上で、味方になり支えること、子どもの言動の底にある気持ちを洞察することは、重要な意味を持つが、多忙な学校教育現場の教職員だけでは、全児童に目を配るのは難しいと考えられる。③児童のコミュニケーションスキルにおける課題:小学校高学年児童および中学生は、スキルの理解はしているが実際に行動できないなどの課題が指摘されている(吉田, 2006)。本研究では、既に学習したスキルを活用する場としての交流授業に着眼する。④開かれた学校づくりと学校支援ボランティアの導入をめぐる課題:平成14年度から施行された新学習指導要領において「開かれた学校づくり」を進めることが推奨され、学校支援ボランティアが期待を集めている。

## 3. 研究方法

### (1) 方法

本研究は、東京都老人総合研究所の藤原らの世代間交流型介入研究“REPRINTS”のフィールドで実施した。6年生の国語科の学習において、絵本を題材にして、既に同校で低学年児童を対象に読み聞かせを行っている高齢者ボランティアとの交流授業を設定し読み聞かせの指導を受けさせた(異世代間交流)。次いで、その成果として低学年児童へ読み聞かせの実演を行う(異年齢間交流)プログラムを提示した。授業は1クラス6回×3クラス実施した。

高齢者と6年生児童それぞれに、交流授業前・後に質問紙調査を実施した。高齢者への質問紙の概要は、基本的属性、子どもへのイメージ、次世代育成指向尺度、コミュニケーション基本的スキルの機能別質問項目、本プロジェクトに望む姿とした。児童への質問紙の概要は、基本的属性、高齢者へのイメージ、コミュニケーション基本的スキルの機能別質問項目、ソーシャルサポートに関する項目、その他、高齢者ボランティアとの交流経験とした。

### (2) 対象

児童:川崎市立A小学校6年生全児童85名のうち、質問紙調査に協力可能な81名

高齢者:藤原らの世代間交流型介入研究Reprintsの対象である神奈川県川崎市の高齢者ボランティア団体から有志24名のうち、事前研修と交流授業の両方に参加した17名

### (3) 分析

交流授業前と交流授業後の高齢者、6年生児童共に対して実施した質問紙調査データを、クロ

ス集計し、それぞれの変化を検討した。交流授業がコミュニケーションに与える有効性を量的に検討した。

#### (4) 倫理的配慮

本研究は、東京都老人総合研究所における倫理委員会によって、審査されたものである。

#### 4. 結果

①コミュニケーションスキルは、児童・高齢者共に得点の平均値に、有意差はなかった。②高齢者へのイメージ得点は、下位尺度「活動性・力量性」因子に有意に得点の増加が認められ、交流授業の効果が示唆された。また、高齢者の子どもへのイメージの有意な変化はみられなかった。③児童のソーシャルサポート得点は、「学校教育ボランティア」および「同級生」をサポート提供者とする数は授業後に有意に増加していた。サポート提供者が「いない」とした項目数は授業後に有意に減少していた。④高齢者の次世代育成指向尺度得点への効果は、有意差は出なかったものの、下位尺度毎の平均値は、上昇を示し改善の傾向がみられた。

#### 5. 結語

コミュニケーションスキルへの効果は明らかにできなかったが、コミュニケーションの土台となり得る相手へのイメージやソーシャルサポートに有意な改善がみられた。良好な関係が高齢者や子どもに継続し、互酬的な QOL の向上へとつながることが期待される。それらの期待のためにも、本交流授業は、量的な分析をさらに進め、質的な分析・検討が必須である。

## 参考文献

- (1) 草野篤子: インタージェネレーションの必要性. (草野篤子, 秋山博介編) 現代のエスプリ; インタージェネレーション, No.444, 至文堂 (2004).
- (2) 共生社会形成促進のための政策研究会: 「共に生きる新たな結び合い」の提唱 (詳細版) (2005).
- (3) 矢島さとる: 今,なぜ世代間交流なのか; 社会教育, 61: (2006).
- (4) 藤原佳典: ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—; 日本公衆衛生雑誌, 52. (2005).
- (5) 落合良行: 小学六年生の心理 子ども期からの旅立ち; 大日本図書 (2000).
- (6) 石隈利紀: 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理的援助サービス; 誠信書房 (1999).
- (7) 吉田均: 学級における生徒一人一人のコミュニケーション能力を高める指導・援助に関する研究—コミュニケーション・スキルを位置付けた活動場面の工夫をとおして—; 岩手県教育研究発表会資料 (2006).
- (8) ナンシー・Z・ヘンケン, ドナ・バッツ: 第5章 アメリカにおける世代間交流の課題を進めて. (Matthew Kaplan, Nancy Henkin 編 加藤澄 訳) グローバル化時代を生きる世代間流, 明石書店 (2008).
- (9) 木林身江子: 高齢者ケアにおける世代間交流の現状; 静岡県立大学短期大学部研究紀要; 19-W. (2005).
- (10) ジリアン・グランヴィル, アラン・ハットン-イオ: 第12章 イギリスにおける世代間の協約: 包括的地域共同体創設の枠組み. (Matthew Kaplan, Nancy Henkin 編 加藤澄 訳) グローバル化時代を生きる世代間流, 明石書店 (2008).
- (11) 小笹奨: インタージェネレーションの基本. (草野篤子, 秋山博介編) 現代のエスプリ; インタージェネレーション, No.444, 至文堂 (2004).
- (12) 築山崇 他: 世代間交流の実態調査報告—京都市・神戸市のアンケート調査より—; 福祉社会研究; 7. (2007).
- (13) 土永典明, 岡崎利治: 世代間交流に関する調査研究—高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から—; 九州保健福祉大学研究紀要; 6. (2005).
- (14) 広井良典: 「老人と子ども」統合ケア, 中央法規出版 (2000).
- (15) 廣瀬隆人: 学校支援ボランティアの概念の検討; 宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告; 10. (2003).
- (16) 藤原佳典: 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果—; 日本公衆衛生雑誌; 53. (2006).
- (17) 藤原佳典: 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因—“REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から—; 『日本公衆衛生雑誌; 54. (2007).
- (18) 中野いく子: 「児童の老人イメージ—SD法による測定と要因分析—; 社会老年学; 34. (1991).
- (19) 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明, 馬場純子: 小学生と中学生の老人イメージ—SD法による測定と比較—; 社会老年学; 39. (1994).

- (20) 西真理子:「交流事業」を通じた6年生児童における高齢者イメージの変化-高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”から-;日本老年社会科学;28.(2006).
- (21) 金田千賀子:子どもが抱く高齢者のイメージ;医療福祉研究;第2号(2006).
- (22) 尾見康博:子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究;教育心理学研究;47.(1999).
- (23) 久田満:ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題;看護研究;20.2.(1987).
- (24) 宮崎隆穂,小玉正博:わが国のソーシャルサポート研究とその課題-カウンセリングにおける活用をめざして-;カウンセリング研究;33-1.(2000).
- (25) 串崎幸代:E.H.Eriksonのジェネラティビティに関する基礎的研究 多面的なジェネラティビティ尺度の開発を通して;心理臨床学研究;23-2.(2005).
- (26) 下仲順子,中里克治 他:E.エリクソンの発達課題達成尺度の検討 成人期以降の発達課題を中心として;心理臨床学研究;17-6.(2000).
- (27) 齋藤幸,星山佳治,宮原忍:少子社会における次世代育成力に関する調査;国立保健医療科学院;53-3.(2004).
- (28) 宮里進男,土志田裕子:世代間交流のボランティア活動.(青井和夫編)高齢化社会の世代間交流;長寿社会開発センター(1994).
- (29) 橋本有理子:老年期における社会的活動、友人関係と精神的健康との関連性に関する研究;関西福祉科学大学紀要;10.(2006).
- (30) 手島陸久,冷水豊:高齢者の余暇活動の測定に関する研究;社会老年学;35.(1992).
- (31) 東京都老人総合研究所:サクセスフル・エイジング;ワールドプランニング(1998).
- (32) 内閣府 HP 高齢社会白書